

8/18 (木) 9:00~12:30

要心館合同稽古

参加卒業生：野村先輩

欠席/遅刻：朴さん、蓮尾さん/井上さん

内容

統率：戸田先生

立ち姿の統一で屈伸、足踏み、前に進む稽古 三人一組

蹲踞の稽古 三人一組

蹲踞で押し相撲の稽古 三人一組

小さい前方回転受身の稽古 三人一組

小さい前方回転受身を60回行う 三人一組

前膝行、後膝行で競争 三人一組

正面打ち二教の見取り稽古 三人一組

横面打ち呼吸投げ(十字入身)の見取り稽古 三人一組

おんぶして一周する稽古 五人一組

四人が手を組んだ中に一人が倒れこむ、飛び込む稽古 五人一組

統率：野村先輩(指導員)

杖投げ 呼吸投げの稽古 二人一組

杖投げ 呼吸投げ(前方投げ)の稽古 二人一組

杖投げ 逆手持ち呼吸投げ(前方投げ)の稽古 二人一組

杖投げ 四方投げの稽古 二人一組

杖投げ 呼吸投げから四方投げまでを通す稽古 二人一組

杖投げ 二教の稽古 二人一組

杖投げ 小手下ろしの稽古 二人一組

統率：戸田先生

膝行鬼ごっこ

今日のポイント：合気道の楽しさを味わう

感想

皆さん、こんにちは。私、一年の坂元です。一週間にわたる土用稽古が終わり、夏休みが早くも四分の一が過ぎました。正直焦っています。私、夏休みに語学の予習、会計学や経済学の復習をしようと考えておりましたが、ほとんど何もしていません。合気道部での活動

が充実しているから良いかと思う自分がありますが、秋学期が始まってから後悔の無いよう、善処します。今回は戸田先生統率の下、要心館の方々が慶應に来て下さいました。小学生から大学生まで沢山の道場生と稽古ができました。稽古全体として感じたことがあります。とにかく技の理解能力に長けている、ということです。見取り稽古というものを初めて行いましたが、私の場合、他者にじっくり教えてもらわなければ、技らしい動きもできず、一緒に組になった要心館の方の、さっと真似できる光景を見てただ驚くばかりでした。私は現在、20歳。小学生や中学生の真似る能力には最早かなわない年齢なのかもしれません。若干の劣等感を抱きましたが、やはり合気道は面白いということはこの稽古でも強く感じました。戸田先生から技は一度や二度では身に付かず、何度も稽古をしていくことで会得していくものだという旨のお言葉がありました。私の場合、土用稽古での周りを回る稽古を通じて受身をそれまでの自分の状態から磨くことができた実感しています。稽古を積み重ねて、自己を高めていくという本質を改めて学びました。要心館の皆さん、また稽古しましょうね。

話題は道場の花壇へと移します。日々草取りを行っている結果、おおよそ花壇全体の雑草を撤去できた段階になりました。皆さんにはいつも好評のお声を頂いております。ご理解感謝致します。私は正直なところガーデニングは好きというわけではありませんでした。取り組んでいるうちに面白さに気が付き始め、趣味にできるのではないかと考えるようになりました。私の中では合気道部の魅力をより高める取り組みの一環として花壇整備を考えております。私の経験だと道場の前を通っていく方々は合気道部という認識があまり無いようです。せいぜい何かの武道をしているところ、ということが会話からも伺えます。こうした状況において、花壇を目にした方の興味を少しでも惹くことができれば良いと思っています。以前は花壇にユリが植えられていたらしく、そのユリを見物に来る方がいらっしやっつたと、とある方から伺いました。華やかな花壇を前に合気道部の宣伝につながることを目標としております。あわよくば花壇に見惚れて入部して下さいる方もいらっしやるのではないのでしょうか。いや、過度の期待は失敗を導き兼ねません。あくまで、部の為として、楽しみながら作業を続けていきたいです。以下、現段階での今後の計画を発表します。上でもお伝えしました通り、雑草の刈取りが概ね終了しましたので、土中に残った細かい雑草や落ち葉をさらに取り除き、綺麗にします。次に考えているのがスーパーハウスを繋ぐレンガ道です。師範をお迎えする際にも重要なため是非作ってみたいと考えております。一方残りの花壇の方では花や野菜の栽培を行うことが重要です。ただ手前の紅葉の木の周りは涼しいのですが日当たりが悪いのが特徴です。私の考えとしては砂利などを撒いて、枯山水即ち和風の庭にしてはどうかと思っております。階段近くの部分は色とりどりのお花を左右から咲かせたいですね。まだ暑さは続きそうですが、季節は秋へと近づいています。秋に栽培できる花を調べておきます。以上、私の妄想とも言うべき計画を書き連ねましたが、合気道部の花壇として、皆さんから様々なご意見を伺って、費用面にも留意して花壇に活かしていきたいと思っております。ご理解、ご協力の程宜しく願います。では、失礼致します。

担当：坂元奎太